

SHISEIDO GALLERY

ギャラリートーク

「落ちる水―滝を語る」

ナビゲーター／十文字美信 日時／2004年7月17日(土) 14:00～16:00

会場／ワード資生堂

司会(樋口) 本日はお暑い中をお運びいただきまして、ありがとうございます。定刻になりましたので、ギャラリートークを始めたいと思います。本日は資生堂ギャラリーで開催中の「Water Falls」展にあわせまして、出品作家の十文字美信さんに自作について語っていただきます。皆さんよく御存じだと思いますけれども、十文字さんは広告写真の第一人者として非常に有名な方ですが、74年のデビュー作「UNTITLED」以降、定期的にご自分の関心のあつるテーマで作品を発表されています。今回は、数年前から取り組んでいる滝の写真についてお話しいただきたいと思っております。

それでは十文字さん、よろしくお願いいたします。(拍手)
十文字 こんにちは、十文字です。きょうも暑いんです。土曜日の午後、せっかくの貴重な時間をさいてお集まりいただいたので、何か実のある話を1つでもしたいなと思つているのですが、今回の「Water Falls」展、この写真展が始まって、よく質問されることがあります。「十文字さんはどうして滝の写真を撮ることになったのですか?」。これは滝の写真に限らずに、どの作品を撮つてもそういうことを質問されるんですね。今日はその動機の話から始めたいと思います。

水辺から滝へ

僕は滝の前は、「わび」というテーマで作品をつくっていました。「わびさび」の「わび」ですね。2002年に、『わび』という作品集を上梓しました。この本は3章に分かれていて、1つ目が自然の章、2つ目が茶の章、3つ目が現代の章というふうに、3つに分けて写真を撮りました。この「わび」の作品をつくっているときに、たびたび水に関する情景に出会ったんですね。「わび」というのは、これは私の考えですけれども、日常生活の周辺から立ち上がってきた美意識だと思っています。ですから、日常生活の周辺を探っていくと、どうしても水に関係する情景にぶつかるんですね。海とか、それから流れる川、沼、池、降りしきる雨。

そういう水に関する写真を撮っているうちに、だんだん滝に思いがいくようになったんです。そのうちに、子供のころのあることを思い出しました。私が小学校に上がる直前だったと思うので、たしか昭和30年になるかならないかぐらいの時期だったと思うんですが、父親と2人で日光の華厳の滝に行ったことがあるんです。子供のころのことですから断片的な記憶なんですけど、残っている記憶は、結構鮮烈なんですね。ただ、エレベーターに乗った記憶がないんです。華厳の滝に行かれた方はご存知でしょうが、エレベーターで100メートルぐらい降りて、滝つぼの近くから滝見をする、そういう滝見台がありますよね。ところが、どうもエレベーターに乗った記憶がないんです。それで、当時はまだエレベーターが

に乗った記憶がないんです。それで、当時はまだエレベーターがなかったのかなと思つて、華厳の滝の事務所に電話したら、「あれは昭和5年からある」と言われたので、あつたはずなんです。けど、乗った記憶がない。乗つたのに忘れてしまったのか、あるいは華厳の滝はもう1つ、エレベーターに乗らずに上から見る場所があるんですね。ですから、父親が料金を節約して、エレベーターに乗らずに上から見たのか、ちょっとその辺はわからないんですが。

そして、まず思い出するのが滝の音ですね。滝の姿が見えないうちから、ものすごい、ゴーッという音が聞こえてきました。それから、ゾクッという、寒い感じですね。その音と寒さが記憶に残っています。実際にものすごい量の水が落下している。あれだけの量の水が落ちていく姿というのは、初めて見ました。それで、正直言うと怖かったんですね。ちょっとたじろぐような、恐ろしいような、しかし恐ろしいけれども、何といいますか、自分の感覚を超えたスケールといいますか、すごいなという、子供のころですから余りうまく言い尽くせないけれど、そういう記憶が残りました。それを思い出して、滝をちょっと見てみようかなと思つたんですね。

それで、出かける前に滝の写真をいろいろと集めてみました。全く何の脈絡もなくランダムに持ってきたんですが、ちょっとこれを見てください。

綿あめみたいな滝

(以下、滝の写真を見せながら) これは「滝百選」という、日本全国の滝を百滝選んでつくった本がありまして、その中から勝手にランダムに抜いてきた写真です。日本の滝百選に出るくらいですから、みんな有名な滝です。皆さん知っている滝もあるでしょう。

この滝の写真を見ていて気づいたことがあるんです。ほとんどが僕が見た滝の記憶と違うんですね。それはどこが違うのか。実は水が写っていないんですよ。この滝の写真は水が白くぼけて、綿あめみたいな白い筋になっている。滝の写真を探してみると、ほとんどがこういう写真なんです。僕の滝の記憶というのは、もっと水が暴れて、水の勢いとか水のエネルギーとか、そういうものが記憶の中に鮮烈に残っていたんですね。ですから、こういう、何といいますか、ボーッとした白い筋のようなものではなかったんです。

それで、あれっ、どうしてだろうと。どうして滝を撮りに行って水を撮らないんだろうと思つたんですね。もちろんこの写真を非難しているわけじゃないんです。「滝のある風景」にはなっているんだけど、僕はもう少し水を見てみたい。物すごい水量で、物すごい高さで、物すごいスピードで落ちてくる水というのを自分で確かめてみたい。そういうふうに思つたのが、この滝の写真を撮り出すきっかけでした。

それで一番初めに華厳の滝へ行ってみたんですね。そうしましたら、雨が上がってしばらくたった日だったんですけども、先ほど見せたような写真にどうしてなるのかということがわかったんです。簡単に言うと、水が落下するスピードというのはものすごいんですから、その落下する様態を一瞬のうちに凍結するというか、写真に収めるには、当然ながら水のスピードに負けない速いシャッタースピードで切らなきゃならないんですね。

ところが、往々にして滝というのは山の中にあるじゃないですか。だから、それだけ速いシャッタースピードで写真を撮るだけの光量がないんですね。写真というのは、絞りとシャッタースピードとの相関関係でできていますから、絞りを開放にして計測しても、普通の例えば100とか200とかのフィルムを使ってやったのでは、15分の1とか30分の1秒とか、そういう遅いシャッタースピードでしか切れないんです。だからこういう、僕は綿あめ状と言っていますが、ああいう白くぶれた写真になってしまう。

僕も最初に行ったときには、こういう写真を撮って帰ってきました。これはちょっと準備不足だったなと。滝を撮るにはもう少し研究して臨まないと、ああいうぶれた水の動きしか撮れない、そういうふうに反省したんですね。それでひとまず帰ってきました、機材の考え方から始めたんです。まず必要なのは、速いシャッタースピードが切れるボディのカメラ。それを使わないと滝は撮れない。

最初に行ったときは、125分の1秒のシャッタースピードまで切ってきたんですね。ところが、やはり自分のイメージの写真にはならないんです。そうすると、当然ながらそれ以上の500とか1000とか、1000分の1とか2000分の1とか、そういう超高速のシャッタースピードで切れるボディじゃないとだめだ。だから、1000分の1秒の高速シャッターが切れるボディを探す。

次は、フィルムですね。当然光量が足りない。薄暗いところから、なるべく感度の高いフィルムを持っていかないと速いシャッターが切れない。ひょっとしたら、普通にノーマルで現像しても足りないくらいの光量も考えられるので、増感しなければならぬ。すると、増感するのに耐えられる腰の強いフィルムじゃないとだめだ。とりあえず高速シャッターをつけられるボディと、増感にも耐えられて感度の高いフィルム。その2つをまず考えたんですね。

分割して撮る

機材はそういう考え方だとして、今度は滝ですね、問題の滝。滝というのは、当然ながら近づけば近づくほど水は見えるんですけども、全体の姿というのは見えません。滝つぼに近づけば、水が落下する最後のところは見えますが、そこから見上げたのでは、今度は水が落下する落下口が見えない。断崖絶壁を水が滑り落ちているのですから、滝の全体を撮ろうとすれば、ある程度離れなきゃならない。ちょうど滝から見て対面にある山の斜面、しかも、仮に100メートルの落差のある滝だとすれば、50メートルとか40メートルとか、滝のちょうど半分ぐらいの高さになるところまで登っていかなきゃならない。そして滝の全貌が見えるポイントを探さなきゃならない。

ところが、ほぼこの場所だったらいいだろうという滝のポイントは見つかったとしても、滝というのは細長いですから、その全貌を撮ろうとすると、どうしても細長い一筋の帯になってしまうんですね。だけど僕は水を撮りたい。水の暴れる生命力というか、滝の魂というか、ただの静かな風景ではなくて、滝そのものを撮りたい。ではどうしたらいいのか。

それで、超望遠レンズをつけて滝を分割して撮ろう。部分部分

を撮って後でそれをまとめて、1つの写真にならないだろうか。そういう無謀なことを考えついたんですね。現実には1200ミリというレンズをつけたんですが、1200ミリのレンズをつけて撮ろう。そして部分部分切って、後でそれを1枚の写真にしよう。

山水画というのがあります。室町時代によくある水墨の山水ですね。それをよく見ると、実は視点の移動というのがあるんですよ。山の頂上の方を描くときには、さらに山の上の方から見た視点で描いているんですね。それで、ふもとの方はその視点移動して、下の方から見ている。そういう山水画というのが結構あるんです。それは1つの絵にしてみると、意外と不自然じゃないんですね。

それから有名なセザンヌの絵の中で、「碗と牛乳入れ」というものがありまして、牛乳入れをある角度から見る。で、当然ながらこれをこの角度から見れば、牛乳入れの口の楕円よりも底の楕円の方が円に近く見えるんですね、角度からいったら。ところがセザンヌは、口を楕円に描いて、底は水平に描いているんですね。これも視点の移動ですね。口の上はこの位置で描いておいて、底を描くときには水平まで視点移動している。でも1枚の絵にすると、それほど不自然に見えない。それはそれでまた1つのおもしろさというか、そういうふうに見えるんですね。そのことが自分の頭の中にあつたので、水は瞬時にいろいろな形で動いていきますから、別々に撮った写真というのがもし仮につながらなかったとしても、水の勢いというか、水の魂というか、そういうものさえしっかり撮るんだという意識があれば、厳密にぴったり合わなくても大丈夫だろうと思ったんです。

皆さんはギャラリーに展示してある写真はごらんになっていただいたかと思うんですけど、あれは1枚の写真を分割しているのではないんです。あれはすべて1枚1枚全部別のタイミングで撮っているんですね。それを、ああいうふうに全体で見て1つの写真にして展示してあるわけです。先ほど話したように、水の落下する時間差がありますので、その都度その都度水の姿形というのが複雑に変わっているんですね。ですから、その方が水の様態の真実に近いと。そういうふうに思って、それで分割して撮影するという方法を考えました。

さまざまな問題が...

ところが実際にやろうとすると、いろいろな問題が出てきたんですね。その1つは、ファインダーの視野率の問題です。ちょっと専門的になりますが、カメラのファインダーの中に見える映像というのは、フィルムに写る100%の映像ではないんですね。どうしてもファインダーの中の映像というのは、90何%かで小さくなっていくんです。そうすると、1コマずつ撮ってつなげようとするには、撮影するときに視野率になるべく100%に近いものでないと、ダブりの部分が多くなり過ぎてしまうんですね。そうでないと、きれいに後で1つの写真にできない。ですから、なるべく100%に近い視野率のファインダーを探さなければならぬ。

それから、1200ミリという超望遠レンズをつける場合、超望遠レンズというのは、当然ながらレンズ1本が長いですよ。重量も重いんです。そういうレンズをつけて、しかも100メートルとか200メートルとかの遠い距離から分割して撮影しなきゃならない。望遠レンズをつけて分割して撮影するときに、レンズの移動する距離というのは、実際にやってみた結果ですけど、1ミリとか2ミリなんですよ、あれは。つまり、1コマずつの差というのは、撮影地点からすると、もう線一本の差なんですよ。線一本の差しか、レンズは動いていないんですよ。そういうことができるだけの、

がちりしていてなおかつ精密に動いてくれる三脚も必要だ。

それから、撮影して帰ってきて、やっぱりうまく合っていないというわけにはいきませんから、ポラロイドで確認したい。その都度撮影してすぐに上下、天地、左右、すぐその場で実際に切っ

てそれをくっつけてみて、これだったら大丈夫だということをその場で確認しないと、何度も何度も行く羽目になってしまう。ですから、ポラロイドもつけられるカメラでないとぐあいが悪い。そういうようないろいろな条件で、少しずつ機材が決まってきたんですね。それで、機材を決めてから、もう一度撮影に行きました。

そうしたら、当たり前前の事態に遭遇しました。それは何だと思えますか。重量が重過ぎる。山に登るには、その機材だと非常に重いんですよ。例えば、ギャラリーに展示してある写真の中で称名滝という、立山にある滝ですね。350メートルという落差なんですけれども、称名滝をあ的位置から撮ろうとすれば、登山道を1時間半ぐらいかけて登っていかなければならない。そうすると、今話した機材ですね、それ以外にもちろん食料、水、それから三脚をがちり固めるためのウェイト、そういうものを持っていかなきゃならない。それはそれは大変な重量でした。

なおかつ、僕は滝の撮影をしているとき、実は椎間板ヘルニアだったんです。去年手術をしまして今は治ったんですけれども、滝の撮影の真っ最中は腰痛に悩まされていて、歩くのもやっという状態でした。それをそれだけの機材で行かなければならない。高木と山口という2人の助手がいるんですが、僕は全く身一つで、もう身一つだけでもやっというのでしたから、助手が2人で手分けして、場合によっては1回では行かなくて、撮影ポイントまで行って荷物を置いてはまた戻って残りの荷物を持ってくるというような、そういう形で撮影しました。ですから、この下の展覧会の写真というのは、助手が2人で撮ったようなもので、僕は本当に体だけで臨んだという状態でした。

写真だけが表現できる世界

いよいよ本番の撮影です。滝全体が見えて、しかも滝の部分部分が撮れるように望遠レンズをつけられるポイントに来てみると、これは実際に自然の撮影を経験したことのある人は皆同じ思いををすると思うんですが、邪魔なものばかりなんです。例えば、草が生えている、木の枝が邪魔だ、あそこの樹木が邪魔だ、特に夏はそうなんですけれども、葉っぱが生い茂っていますから、なかなか滝が見えないんです。全体がきれいに見える場所を探したとしても、現実的にはなかなか見えない。

それで、まず邪魔な枝の始末から始めるんですね。当然、国立公園とかそういう大事な場所ですので、勝手に木を切ったりできませんから、どうするかといいますと、ロープの先に重しをつけてぐるぐる振り回して、カウボーイみたいに引っかけて、それでぐうっと引っ張って、別のところに結わえつけて、フレームの

外に出すんですね。ところが、そういうふうにしてうまくいかないのがあります。ですから、下の写真で、手前の方にいっぱいぼけているのがある。それはどうしても避けようがなかったものですね。

それ以外に、手が届くものに関しては、命綱を体に縛りつけて、それで身を乗り出してなるべく結わえたり、どけたりする。これも僕の仕事ではなくて、助手がやりました。もしその命綱が切れて落下すれば、数十メートルか100メートルか下の滝つぼに真逆さまに落ちこちますから、竜神様の餌食ですね。でも竜神様に食べられることもなく、みんな無事に帰ってきました。

下のギャラリーで展示しているのは30分割している写真が多いですね。30分割すると、仮に1コマ目の写真を撮り始めてから30コマ目の写真を撮り終わるまで、どのくらい時間がかかると思いますか。大体2時間半から3時間ぐらいかかるんです。そうすると、どこから撮り始めるかというのが大きな問題になってくるんですよ。どうしてかといいますと、山の中ですから、どんどん天気が変わるんですね。突然ガスが発生したり、あるいは曇っていたのに突然日が差したり、日が差していた天空が突然曇ったり、もう見えなくなったり見えたり、そういうことの繰り返しですね。ですから、最低2時間ぐらい同じ気象状態になることを願って撮影するんですけれども、それにしても、どこから撮影するかというのが大きなポイントで、なぜかという、どうしても誤差が生じてきて、どんどん後ろにいくに従ってずれていくんですね。ですから、最初に一番大事なところから撮り始めるんです。人間の顔でいうと目ですね。

華厳の滝でいうと、真ん中の辺です。この辺がこの滝のポイントだというふうには僕は思っているんです。どうしてかという、いろいろな水の形が1コマの中にあるんです。落下する水とか、岩に碎けて飛び散ったり、最後は霧状になったり。しかしよく見ると、その落下する速度によって、あるいは光によって、水の粒粒がとまって見えたり、いろいろ千変万化、さまざまな複雑な表情がある。それが今回僕が写真で表現しようとした世界なので、こういうところから撮影を始めるわけですよ。この写真から始めて下に落ちていく。それでまたここから上に上げてやる。そして今度は横に行くわけです。そういうふうにして全部撮るわけです。

でも人間の目では、1000分の1秒のシャッタースピードで撮った水の姿とか水の動き、水の様態というのは確認できません。物すごいスピードで滝は落下していますので。ですから、写真だけが持っている世界というか、写真だけが表現することができる世界ですね。そういう目で滝を見てみると、非常に神秘的ですね。滝というのはすごくおもしろい。寄って見ると、そういうふう

滝の表情

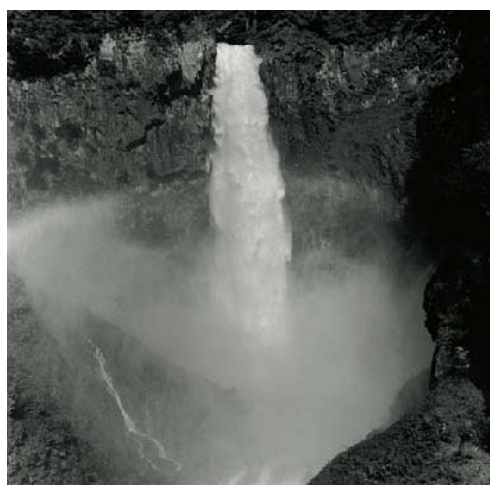
滝というのは水量によって全く違った表情になるんですね。もうそみたいに、これが同じ滝かというくらいに、自分が見たときの滝がどのくらいの水量かで、印象が全く違います。それをちょっとごらんに入れようかと思うんです。

①



① これは分割した写真じゃなくて、1枚の写真です。ただし、これはローライというカメラで撮影したものですから、シャッタースピードが500分の1秒しかないです。華嚴の滝です。これは通常の水量のとき、毎秒1トンぐらいの、通常の水量のときの華嚴の滝ですね。

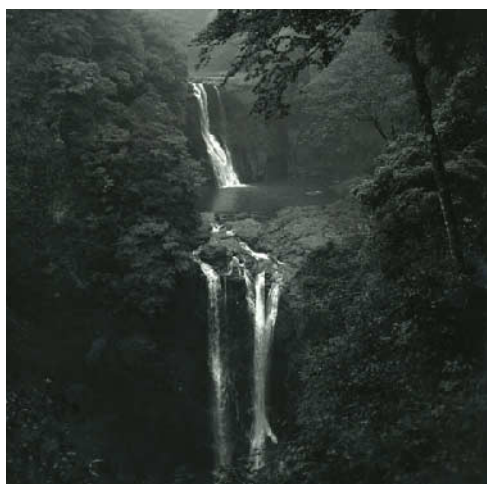
②



② これも華嚴の滝ですね。これは雨が降って、華嚴の滝というのは中禅寺湖の水門で水量を調節しているので、このときは水量を多く流したときですね。

こういう状態のときに華嚴の滝に行った方は体験していると思いますが、この写真を撮る場所に立つと、全身びしょぬれです。カメラもびしょびしょですね。

③



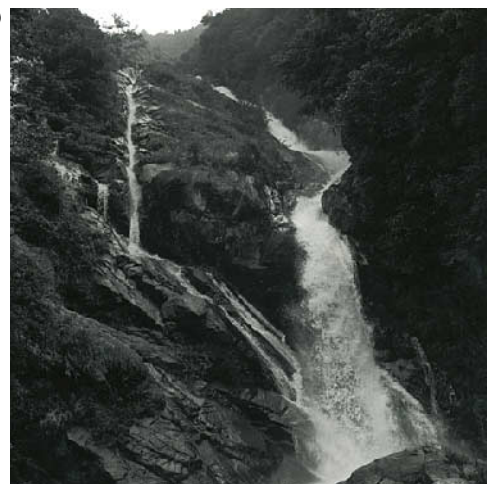
③ 下にもありましたが、これは鶉の子滝、熊本県ですね。これは通常の鶉の子滝です。これはこれできれいですけれども。熊本に行かれるチャンスがあったら、ちょっと足を伸ばして、ぜひ鶉の子滝を見に行ってください。すごくいい滝です。

④



④ これも鶉の子滝です。これは大雨が降った後に撮影に行行って撮ったものです。

⑤



⑤ もう1つ。これは佐賀県にある見返りの滝。これが通常の見返りの滝ですね。佐賀県の相知町というところにあるんですけども。



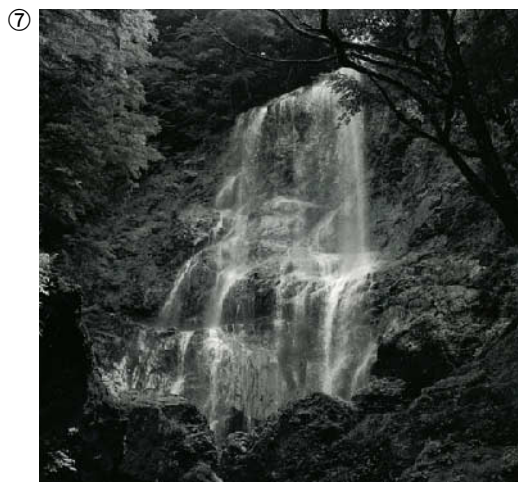
⑥ これは大雨のときに撮影しました。このときもちろん全身ずぶぬれで、レインコートでガチガチに固めてカメラを懐の中に入れて、それでバチッと1コマ撮ってすぐに逃げ帰ってくるという、そういう状況ですね。

ですから、一口に滝といっても、その滝がどういう水量だったか、どういう状況だったかによって、全く見え方が違うということですね。それも滝の魅力の1つですね。

僕は、水量の多いときの滝が好きなんです。何とも言えず怖いんですよ。怖いんですけども、何とも言えず気持ちがいいというか、ふだんの日常生活ではなかなか味わえない怖さというか、ぞくぞくする感じ。ちょっと一歩間違えるとそのまま押し流されて藻くずと消えてしまうような。

結局、滝というのは、先ほど見せたそれほど水量がないときというのは、僕が思うに、風景の一部なんです。滝がある風景。滝は風景の一部、そういう感じがします。ところが、一たん雨が降って水量が多くなってくるに従って、滝は暴れるんですね、物すごく。そして、風景から脱出しようとしている。風景から飛び出そうとしている。滝が生命力を得て、ばたばた暴れているように見える。それをじっと見ていると、当然ながら水は上から下に落ちているんですけども、水量が多いときに滝を見ていると、むしろ地上から天空に水がだんだん立ち上っていくような、そういう非常に不思議な感覚になります。それも滝の魅力の1つではないかと思っています。

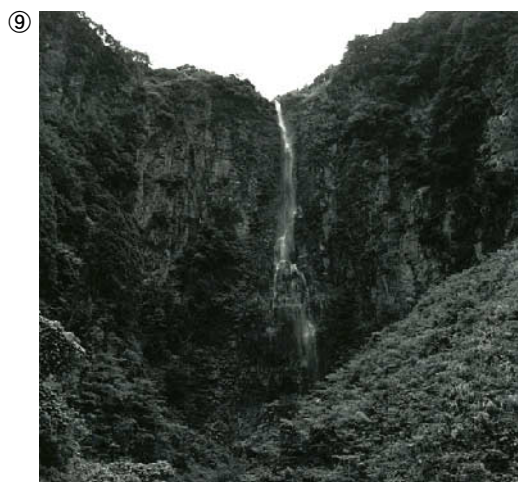
本当はもう少し環境のよい状況で見ただけたらというふうにも思うんですが、下のギャラリーで発表していない写真を何点か持って来ました。



⑦ これも余り知っている方は少ないかと思います。熊本県にある白糸の滝という滝ですね。熊本県って、実はめちゃくちゃおもしろい県で、滝が40も50もあるんですね。そのどれもすばらしい滝なんです。

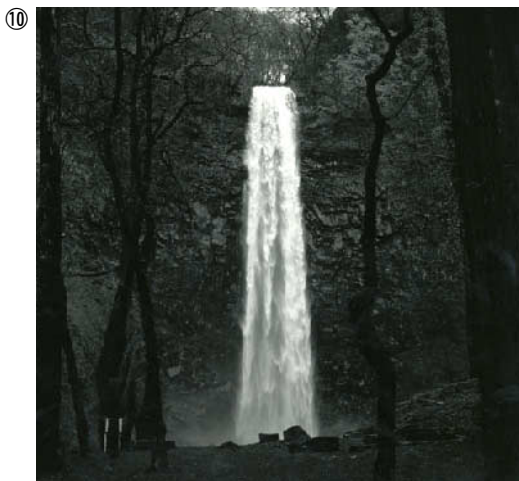


⑧ ちょっとわかりにくいですが、これは数鹿流ヶ滝という滝です。これも熊本県の長陽村というところなんです。これは何の苦労もなく行けるところなので、ぜひチャンスがあったら行ってみてください。



⑨ これは古閑の滝という名前の滝で、これも余りふだん見られない、ある条件がそろわないと水が落ちてきません。ふだんは枯れ滝ですね。雨が多いときだけこういうふうに滝になる場所です。

僕はここが結構好きで、何回か行ったんです。雨が降ると「それ行け」という感じで。



⑩ これは玉すだれの滝といいまして、山形県ですね。ここも車をとめてから1分ぐらいでこの場所に來られます。これも簡単に見れる滝にしてはすばらしい滝ですね。この写真を撮ったときは少し水量の多いときですけど、ふだんはもう少し水が少ないです。

白い布を張る

滝は、昔から日本では「神が棲むところ」というふうに言われていました。ですから、そのために信仰に関係する名前の滝というのが実に多いんです。もう数限りなくと言っていいぐらいあるんですね。不動の滝、法体の滝、権現滝、観音の滝、阿弥陀滝、もちろん華嚴の滝もそうですね。

その中で、今回撮影した滝の中に称名滝というのがあります。富山県の立山を流れる称名川にかかる滝です。これは落差350メートルで、日本一の大滝なんです。この称名滝に関する文献を当たっていたら、実際に滝の撮影へ行く前にはできる限り調べられるものは調べて行くんですが、ちょっとおもしろいものを見つけました。それは「往生伝法華験記」という鎌倉時代にできた書物がありまして、今昔物語より100年ぐらい前の往生伝ですね。その法華験記の中にこういう記述があったんですよ。

「大いなる滝あり、高さ百余丈、名を称名滝という。白布を張るがごとし」

僕はこの記述を見つけたときに、「白布を張るがごとし」という言い方に非常に引かかったんですね。滝を形容するのに「白い布」という言い方。そういえば、滝の名前の中に、布どめの滝とか、布引きの滝とか、「布」という字を当てることが多いんですね。これは昔から、滝を見て布を連想することが多かったということですね。

確かに、そういうふうにしてしてみると、例えば深い緑の山の斜面に、あるいは黒々としたぬれた岩肌に白い布が張ってある。風景としては確かにそういうふうに見えるかもしれない。でも僕は、この表現を見て、実は物足りなかったのです。この記述を見て改めて滝を見に行っても、「白い布」というふうには見えませんでした。僕にはやはり「布」ではなくて、流れ落ちる水に見えました。

それで、一番最初にお見せした、僕が「綿あめ」というふうに称したあの滝というのは、実は昔から日本人が滝を見て言う「白布を張るがごとし」という、「白い布」という言葉にどうもとらわれて、それでああいうボンヤリとブレた滝の写真になったのかなと。最

初に言った物理的な理由、つまり光量が足りない、少し暗いという理由もあるかもしれないけれども、実はこの「白い布を張るがごとし」という表現にとらわれて、ああいうような見方になったのかなと思いました。

きょうの話の最後に、10分間滝の音を聞いてください。これからお聞きいただくのは、震動の滝という滝。今回会場で滝の音が流れていたと思うんですけども、実はあの滝の音というのは、ソニーミュージックの方が、実際に僕が写真を撮っている場所まで来て、録音していただきました。途中で足音が入ってきますが、それは僕が実際に歩いている足音です。ですから、滝の音を聞いて、「ああこんな環境で、こんな状況で、今話したような撮影をしていたんだな」ということを、ちょっとイメージしていただきたいと思います。

この「震動の滝」という名前は、やはり水量の多いときに、まるでこう地面が震動するぐらいに水音がすごいということから、「震動の滝」という名前がついたそうです。

(この後、滝の音)

マイナスイオンをいっぱい浴びたと思います。これできょうの話は終わりにしたいと思います。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

皆さんもすっかりいい気持ちになられたと思うんですが、残り30分少々ございますので、これからは皆さんのご質問、ご意見、ご感想等をいただく時間にしたいと思います。どなたか何かございましたら。

会場A さっき地下で写真を拝見させていただきましたが、あのプリントをどうして焼かれたのですか。一番先にどこから焼いていたか。真ん中から焼き始めてそれに合わせて焼いたのか、それをどうしてやったのか。それをどなたがやられたかですね。

十文字 あの大きな写真は、僕が自分で焼きました。小さい方の写真は助手が焼きました。大きな写真は、実は展示するときに初めてああいう状態で見れたんですね。あれだけの広さの場所なんていうのは、もちろん僕のところにはないし、ですからすべてをつなげた状態というのは、実はここで初めて見たんです。ご質問のとおりで、すごく難しかったんですよ。というのは、どういうふうにつながっていくかというのが、焼きながらではわからないんですね。プリントしている紙は、イルフォードという紙を使っているんですが、ドライダウンがすごく激しくて、つまりぬれている状態と乾いた状態とではまた全然トーンが違うんですよ。

そういうことと、それからつなげたときの全体が見えないですから、何を基準にして焼いていったらいいかというのが、非常に難しかったんです。それで、初めに一通り焼いたのは全部失敗でした。あれは二度目に焼いたもので、実は開催日ぎりぎりになってきたんですね。

紙焼きしたのも、撮影したのと同じ順番で、この写真がこの滝の一番ポイントだぞというところから紙焼きを始めました。それで、一番難しかったのは、水のトーンというのは当然白いですから、横の黒い岩のトーンとのバランスですね。そこがやはり一番難しかった。撮影のときもそうなんですが、同じ露出で切ることとはできないんですね。1枚の写真でしたら、黒くてつぶれるところと白くて飛んでいるところがあって当然なんですけど、部分部分で撮るということは、その1枚の中である程度トーンがないと非常に難しいんですね。そのトーントーンで露出を決めていきますから、露出もばらばらでした。ですから、紙焼きが難しかったです。

会場A 今、イルフォードの紙をお使いになったとおっしゃって

ましたね。あれはマルチグレードか何かお使いになっていたのですか。
十文字 そうです。マルチグレードです。

会場A 僕の感じで申しわけないですけども、あそこで張るのであれば、もう少しかたかった方がよかったかなと思ったんですけども、どうなのでしょう、その辺は。

十文字 それは好みの問題で、そういうふうを感じる方もいらっしゃる、あれでもかたいというふうを感じる方もいらっしゃるかもしれない。

会場A どうもありがとうございます。

会場B 先生のお写真を初めて僕が見ましたのは、2年前のBunkamuraの松本幸四郎さんの。僕も歌舞伎芝居が好きなものですから、それで飛んで行っただんですけども、そのときのご苦労といえますか、劇場の中の撮影かと思いますが。

十文字 幸四郎の場合ですか。

会場B ええ。そういったときの工夫があればと。そのことと、きょうの下でちょっと見たお写真は、カラーでないですね、白黒の。それは何か技術的に意図があったのかなと思って。十文字 まず、幸四郎さんの写真の場合は、ほとんどが舞台ですよ。ですから、舞台の撮影の撮り方というか、例えばシャッター音がなるべく周りの人に聞こえないように音をカバーしなけりゃならないとか、それから、自分でカメラアングルを決めることができませんから、ある程度指定された場所で撮らなきゃならないとか、まあそういうことがいろいろありますね。今自分の頭が滝に行っているの、ちょっと松本幸四郎には行かないんですけども。

それと、滝の写真のことで言えば、モノクロームを使ったというのは感度の問題ですね。あれはフィルムはTRI-Xというフィルムを使っているんですけど、先ほど言ったように、なるべく感度が高く、増感に耐えられるフィルムを探して撮影したんですけど。ですからカラーというのは、物理的な理由で最初から考えていませんでした。

会場C 私は写真のことは本当によくわからないんですけども、なぜ日本の滝だけに注目されているのか。海外にも滝は非常にたくさんあると思うし、あとはスケールの大きなものもあると思うんですけども、そちらに目を向けることは今後あるのかどうかというのが質問です。

十文字 日本の滝しか撮らなかった理由は、ひとえに金銭的な理由です。お金があればブラジルなりどこなり、アマゾンなり行っただけですけども、お金と時間ですね。それと、日本以外の滝というのを訪ねて行ってないからはっきりしたことは言えませんが、映像で見たりにしている限りで言うと、滝に対する思いというのが、日本人とほかの国の人とはちょっと違うかもしれません。僕はやはり、先ほどから言っているように、水の姿というか、水が落ちているときの神秘的な状態というか、神秘的な形みたいなものに非常に興味があったのですね。世界のほかの国の方々というのは、滝を見てどういうふうにしたのかというのは、僕は調べていないからわかりませんが、もしそういう思いの滝が世界にも存在しているんだとしたら、ぜひ見に行ってみたいなとは思っています。

会場D 滝じゃなくて、雨の作品なんですけれども、どの視点もすごくいい、キュンと来る、グッと来るという感じを受けただけですけど、視点というのはどうやって見つけていったのですか。偶然歩いて見つけたものか、頭のイメージを形にしていたものか、どういうふうか。

十文字 あれは全部記憶、自分の記憶の映像です。今回滝の話の中でそのところをうまく言えなかったんですが、僕の写真という

のは、すべての写真と言ってもいいかと思うんですが、自分の記憶というのが常にポイントになっています。ですから、何か映像を撮るときに、必ず自分の記憶の中にこういう映像というのが、過去に自分で見たことがあるんじゃないか。あるいは、自分の記憶の中に鮮烈に残っている映像と、今自分が実際に目の前にしている現実の映像とどこかで共通点がないとか、そういうふうに分の記憶と結びつけながら考えるようにしています。ですから、今回の映像は15点の雨のシーンなんですけれども、あれは全部自分の記憶をもとにして撮影したものです。

会場E 十文字さんの「わび」という作品は、本当に心にしみる写真がたくさん集められていて、その中で今回滝に焦点を当てたということなんですけれども、今後またあの作品の中で、滝以外に何か焦点を当てていこうというものはございますでしょうか。

十文字 「わび」の中ですか、「わび」で撮った写真の中で。

会場E でもいいですし、ほかにまた。

十文字 今興味を持っているということでもいいんです。

会場E はい。

十文字 今はよく見えないものに興味があるんですよ。だから、どういうふう写真にするかということはまだちょっと決めてないんですが、例えば消えてしまうものとか、それからはっきり見えないものとか、一瞬のうちに動いてしまうものとか、そういうものに非常に興味があって、それを今撮ろうとしているし、撮りつつあります。僕の場合、作品はいつもそうなんです、何を撮ろうって最初にあるんじゃないで、だんだん決まってくるんですね。自然にと言ったら変なんですけど、何か自分で興味を持っていることを写真でやっていくうちにだんだん形になるみたいなので、今興味を持っていることは、さっき話したような、見えないようなもの、あるいは消えてしまうようなもの、そういうものをちょっと今撮っています。

僕、近眼なんです。それで眼鏡を外すと、簡単に言うともよく見えないんですよ。実は、「近眼旅行」というタイトルで1つつくりました。自分が眼鏡を外した状態でベニスに旅行に行ってきた、それで作品をつくってきました。それはまだ未発表ではありますが、本当は言っちゃいけないのかもしれない(笑)。

会場E ありがとうございます。

会場F 先ほどのお話の中で、1200ミリのレンズをつけて撮影されたということなんです、そのレンズをつけたカメラは何というカメラか教えていただくことはできますか。

十文字 ペンタックスの67というカメラです。なるべくフィルムサイズは、小さいよりは大きい方がいいと思っているんですけど、それは単純に情報量が多いから。だからクオリティということから、なるべく大きなフィルムサイズのカメラがいいと思っているんですけど、先ほど話したように、例えば4×5とか8×10とかというのだと、ちょっと今回滝の撮影には向いていない。35ミリで撮るには、少しサイズが小さいのが不満だったんですね。実は、この作品は、最初に発表しようと思ったときの形態というのは、これの4倍の大きさなんです。だから天地が12メートルですね。天地が12メートルの大きさに1つの作品をするには、35ミリだとちょっと苦しい。そういうようなことで67になりました。カメラはペンタックスです。

会場E どうもありがとうございます。

十文字 本当はペンタックスが協力してくれるといいんだけど(笑)、全然協力してくれませんね。

司会 若干まだ時間がございますが、これで終了したいと思います。

十文字さん、どうもありがとうございました。(拍手)

十文字 ありがとうございます。(拍手)